

名古屋城三の丸遺跡の古代集落 -熱田台地の古代集落と愛智郡・山田郡（1）-

永井邦仁

愛知県名古屋市には名古屋城を北西隅に戴く熱田台地がある。名古屋城とその城下町として江戸時代から現代へと繁栄を続けるこの街には、1000年以上前にも多数の集落が蟠踞し、地域の拠点として機能していた。この熱田台地には尾張国の山田郡と愛智郡が関係しており、それぞれの領域で占められていたはずであるが、その境界については定説をみない。本稿ではまず郡境設定時の集落の状況を検討し、その鍵が名古屋城三の丸遺跡にあるのではないかと推察する。

1. 古代の郡領域への関心

平らな尾張平野を行き交い常々思っていることがある。尾張国の郡境はそれぞれどこにあったのだろう。平野は沖積地が主体であるため、目印や境界線を固定するための不動のものはきわめて少なく、河川がそれに充てられていたとしても洪水や極端には定期（季節的）に移動していたかもしれない。奇妙な心配事といえばそれまでである。

考古学的な手法では、モノ（現象）の時間的変遷とともに空間的異同が最も重視される。そして抽出された後者と、空間を人為的に区切るさまざまな境界線との対応関係も問題になる。今の愛知県にほぼ相当する令制尾張国・参（三）河国の国境画定について『愛知県史 通史編1 原始・古代』（愛知県史編さん委員会 2016）では、『日本書紀』の記載から天武12年（683）以降に行われたと記されている。そして7世紀後半に設置された評（郡）の領域については同書の第5章第2節において尾張国・三河国の評（郡）分布が掲載されている（図5-2-2）にとどまる。残念ながら、逐次根拠を示しながら説明するには郡境は長大であるし、逆に近・現代の郡境あるいは市町村境に引き継がれていると説明すれば足りるものも混じっているので、一律に示せない事情があるのは確かである。

さて、特に筆者が関心を寄せるのは尾張国山田郡の領域である。その郡境に関する研究史は後稿とするが、山田郡は戦国時代に隣郡に吸収されて消滅してしまう経緯がある。一方でその

領域と尾張国的主要窯業地である猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）が重なって見える点は、それが評の領域設定の根拠の一つであったと想像がつく。そこで筆者は山田郡の領域について、集落遺跡と窯業遺跡の分布からの推測を試みる。手始めに、熱田台地に立地する集落遺跡を整理し7～9世紀における特徴を抽出し、後の検討に備えることとする。

2. 热田台地の古代集落

熱田台地は庄内川左岸にある。粘土質の熱田層で構成される台地で、名古屋台地とも呼称される。標高8～10mに台地縁辺があり、標高約13mに最高地点がある。現在熱田神宮のある南端から北端までの長さは約7kmである。熱田台地の東側には砂礫を含む大曾根層からなる一段低い台地（大曾根凹地）があり、その先で再び高くなつて台地（瑞穂台地）を経て丘陵地帯（八事層）に至る。

熱田台地はその縁辺に多数の遺跡があり、その大半で古代集落あるいは古代寺院の遺構・遺物が含まれている。評成立期のそれは、大きく3つの分布地域に分けることができる。北は台地北縁の長久寺遺跡から名古屋城三の丸遺跡までの地域、その南に豊三蔵通遺跡を中心とする地域、南部は台地が半島状に細くなる正木町遺跡から尾張元興寺（願興寺）跡、台地東縁の富士見町遺跡までの地域で、これに台地南端の高蔵遺跡・玉ノ井遺跡が含まれる（図1・2）。

本稿ではこのうち名古屋城三の丸遺跡を取り上げてみたい。

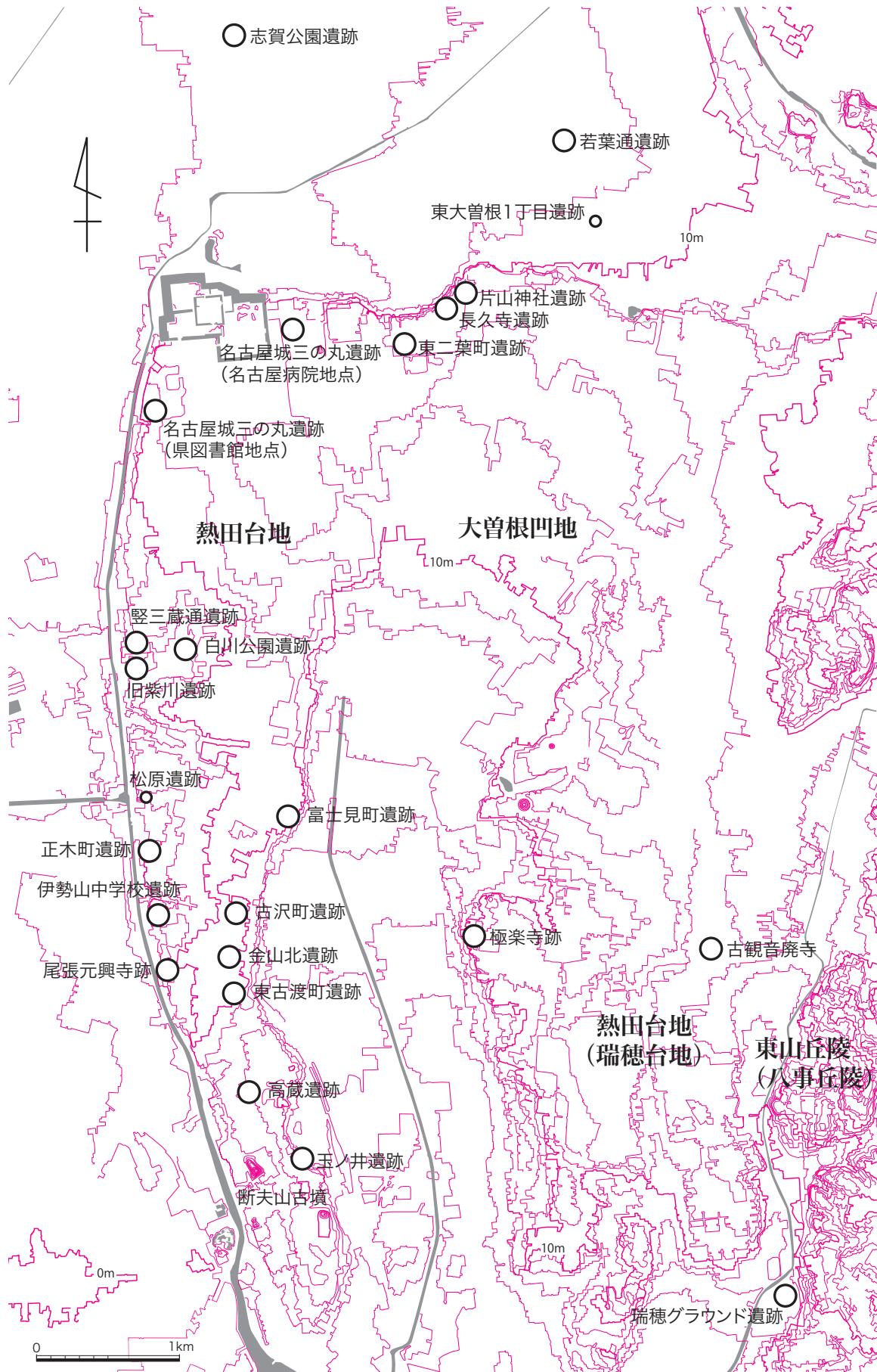


図1 热田台地から八事丘陵にかけての地形と古代集落遺跡分布図

(永井 2017 を改変、国土地理院発行 1万分の1地形図 名古屋城、守山、栄、東山公園、熱田神宮、野並をもとに等高線図を作成)

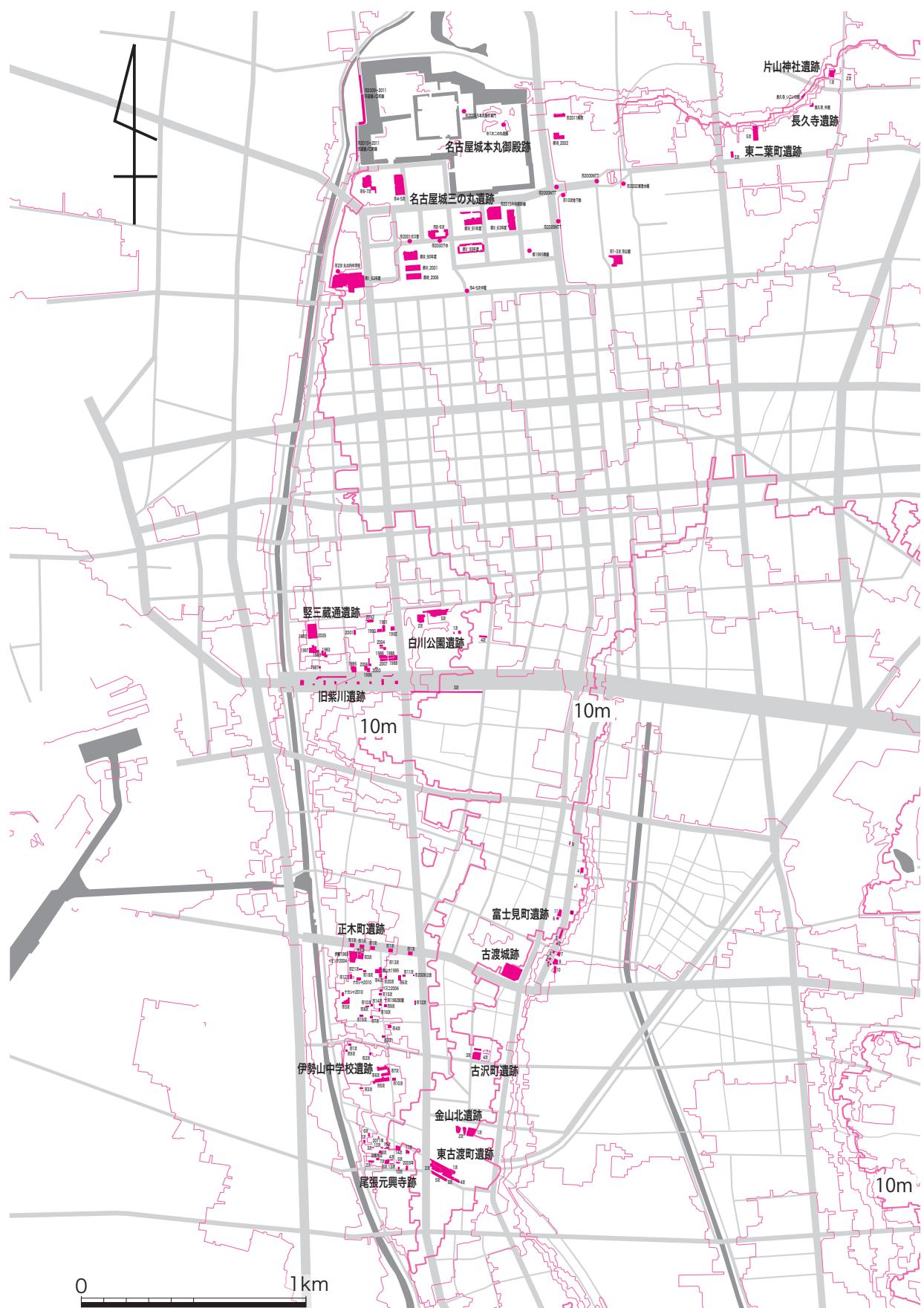


図2 热田台地における古代集落に関する遺跡の発掘調査地点（図1を改変）

3. 名古屋城付近の古代集落

現在、名古屋城跡は特別史跡名古屋城跡として本丸や二の丸（庭園）・西の丸および三の丸外堀などが特別史跡となっている。そのうち三の丸外堀に囲まれた名古屋城三の丸は官庁街となつており史跡外ではあるが、文字通りここには江戸時代の名古屋城三の丸だけでなく戦国時代の那古野城跡に関わる名古屋城三の丸遺跡として周知されている。当該遺跡では昭和63年（1988年）に愛知県図書館建設に伴う発掘調査は愛知県埋蔵文化財センターによって行われたのを皮切りに、各庁舎などの建設に伴つて順次該当地点で発掘調査が進められ、近年ではJR東海の中央新幹線非常口工事の事前発掘調査も実施されている（図3）。

名古屋城三の丸遺跡では古代集落遺跡に先行する時期として、弥生時代後期～古墳時代前期集落と墓域に始まり、古墳時代中期にも円筒埴輪を伴う古墳群が造営されていたことが明らかになっている。しかしながら、名古屋城造営段階に大規模な削平と整地が行われており、きわめて平坦な場所として現在に至っている。した

がってそれより古い段階の集落などの景観を復元するためには古地形の復元が必要となるのだが、長らく平面のみを提示することがなされていました。しかし平成16年（2004年）の発掘調査報告書では、本丸や二の丸を中心とした等高線による古地形の想定図（図4）が提示された（名古屋市上下水道局水道本部2004）。これによれば、熱田台地の北西端の角地にある名古屋城天守は、まさに尾張平野の沖積地帯に突出するかのような岬地形の先端にあり、そこから特に南東方向へ比較的高所が尾根状に続くことが示されている。旧地形の想定が三の丸まで及んでいないのであるが、南東側に続く高所から北側は天守のすぐ東側とともに急斜面になつており、後述する名古屋城三の丸遺跡の名古屋病院地点あたりでようやく台地北縁の緩傾斜になることが考えられる。一方同高所から西側は比較的台状に平らな地形が続き、全体に緩傾斜だったと考えられる。以上はきわめて興味深い想定である。つまり城と城下町街区が成立する以前は、台地西縁と北縁それぞれから広がる空間はこの尾根筋によって区分あるいは分断されていた可能性が予想されるからである。遺跡の主題が江戸時代にあるため致し方ないが、実質中世以前

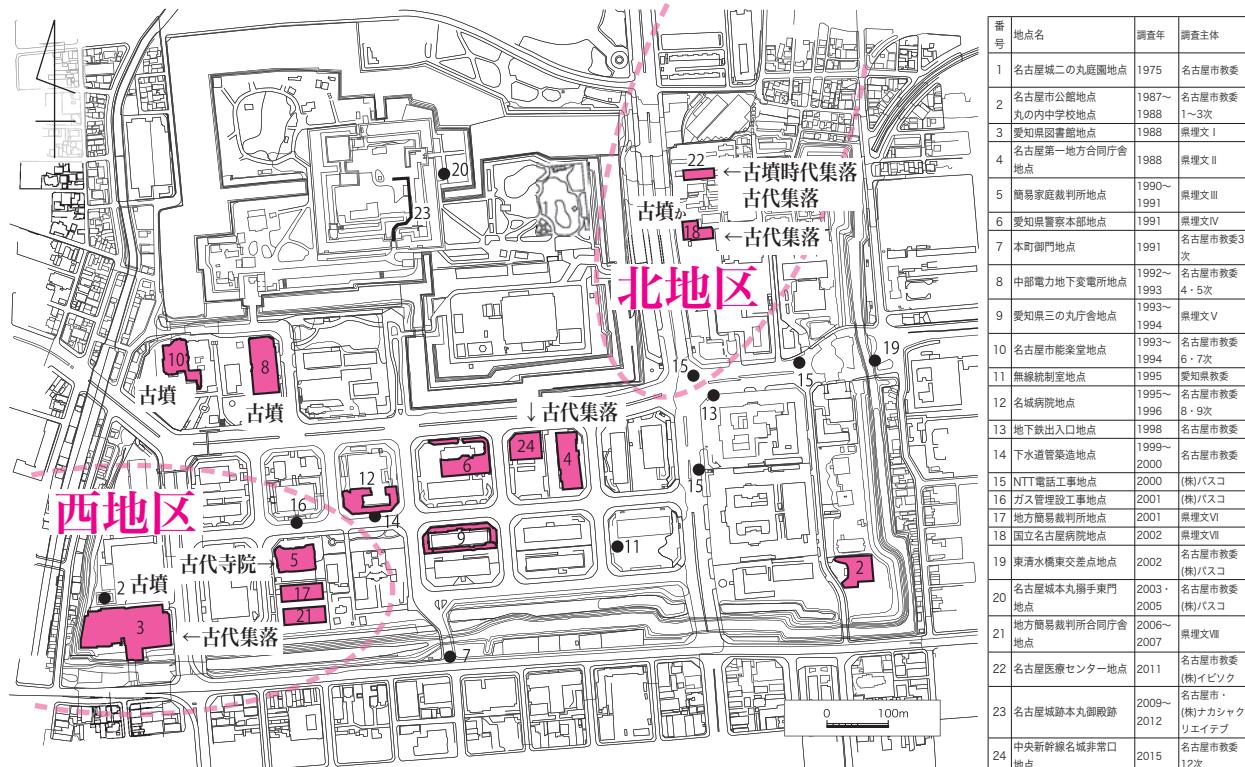


図3 名古屋城三の丸遺跡と特別史跡名古屋城跡における発掘調査地点（愛知県埋蔵文化財センター2008年に加筆）

は2つの遺跡あるいは2つの地区として理解すべきである。本稿では三の丸西地区と同北地区に分けて表記する。

西地区では図書館（県埋文1990：『I』）、家庭・簡易裁判所（県埋文1992：『III』）、中央新幹線非常口地点（旧建設省合同庁舎地点の区画北西隅、名古屋市教委2017）の3地点で古代集落の遺構や遺物が検出されている。ちなみに愛知県三の丸庁舎地点（県埋文1995『V』）では溝SD802より円筒埴輪片が7点出土している。また中部電力地下変電所地点（名古屋市教委1994）では5世紀代の須恵器や円筒埴輪の出土する円墳・方墳（の周溝）が5基検出され、さらに台地西縁の能楽堂地点（名古屋市教委1995）でも方形周溝墓2基と5世紀代の方墳SX03が検出されているので、その辺りまで墓域が形成されていたとも考えられる。先述のように西地区でも東寄りは那古野城もしくは名古屋城造営に関わる削平が大きいために遺構が滅失していることを考慮しておく必要はあるが、

北隣の県警本部地点でも古墳時代から古代の遺構・遺物が未検出であるので、東寄りでは全体に希薄になっていることは確かといえる。

西地区で最も濃密に古代集落跡が検出されたのが図書館地点である（図5）。当該地点では報告書（愛知県埋蔵文化財センター1990）によれば、掘立柱建物跡6基と竪穴建物跡49基が検出されている。報告書では古代集落は3期（II-1・2・3期）に区分され、それぞれが出土須恵器を猿投窯編年に対応させて7世紀後半～8世紀前葉、8世紀中葉～9世紀前葉、9世紀中葉～10世紀の暦年代とされている。現在では高蔵寺2号（C-2）窯式期が8世紀前葉よりも8世紀初頭に限られる可能性が高くなっている。若干の齟齬があるものの大筋では変わらないものとみている。

II-1期には、大型の掘立柱建物跡SB250と竪穴建物跡5基が相当する。SB250は南北棟の側柱建物でこれといった特徴がないものの梁行3間（6.6m）×桁行5間（11.0m）の規模は



図4 名古屋城本丸跡における旧地形の復元（名古屋市上下水道局水道本部 2004に加筆）

一般的な2間×3間を凌駕している（図6）。柱掘方もやや崩れているが長径0.6～0.8mの方形を基調としていることから、官衙建築が地方で導入される時代を反映しているとみて7世紀末～8世紀初頭が考えられる。これと掘方の形状が似ているSB255も梁行3間で同規模となるであろう。報告書本文では同時期に比定されている。これら以外に掘立柱建物がなく、当該期において集落の中心的建物であったことは間違いない。また本調査区では遺構検出面が標高11.0m前後でほぼ水平となっているが、先述のようにここから東方にむかって緩い上り傾斜が想定されることから、これらが堅穴建物跡SB221やSB226よりも若干高所になると想像される。建物規模が階層差を表している前提に立てば、SB250・255の住人は集落の有力者だったと考えられる。これに関して、場所は離れるが西三河地域（鴨評＝賀茂郡）に類例を求めるに、豊田市高橋遺跡では同規模の大型掘立柱建物跡を中心とする建物群があり、有力者の居宅と考えられている（新修豊田市史編さん専門委員会2017）。翻ってSB250とSB255の間は調

査区外となっているが、ここに建物群の続きがある可能性もある。

次にII-2期であるが、当該期に含まれる掘立柱建物跡はなく、対称的に堅穴建物跡が37基で最多になる。堅穴建物跡は堅穴部の一辺が3.1～4.9mで3m大が大半であることから、小型化が進んでいる。これは類例の多い西三河地域でも同じ変動である（岡安1996）。そのような大勢ではあるが、堅穴建物SB227は5.8m×4.6mで同時期において一回り大型となっている点が注目される（図6）。興味深いことに当該建物跡の南側にも同規模のSB230がある。また少し西へ離れた一群にも同規模（一辺5.4m）のSB219がある。SB230はII-2期かどうか遺物からは特定しづらい。ともあれ堅穴建物が8世紀代に小型化する中でも規模の大小が存在している点は豊田市域の事例（梅坪遺跡・寺部遺跡）にもある（永井2018）。遺物の内容も円面硯や銅帶金具などが出土しないと、より一層集落内の階層差が見えにくくなる時期でもある。

一方でII-2期は、建物の群構成が明瞭になる時期でもある。もちろん戦国時代から江戸時

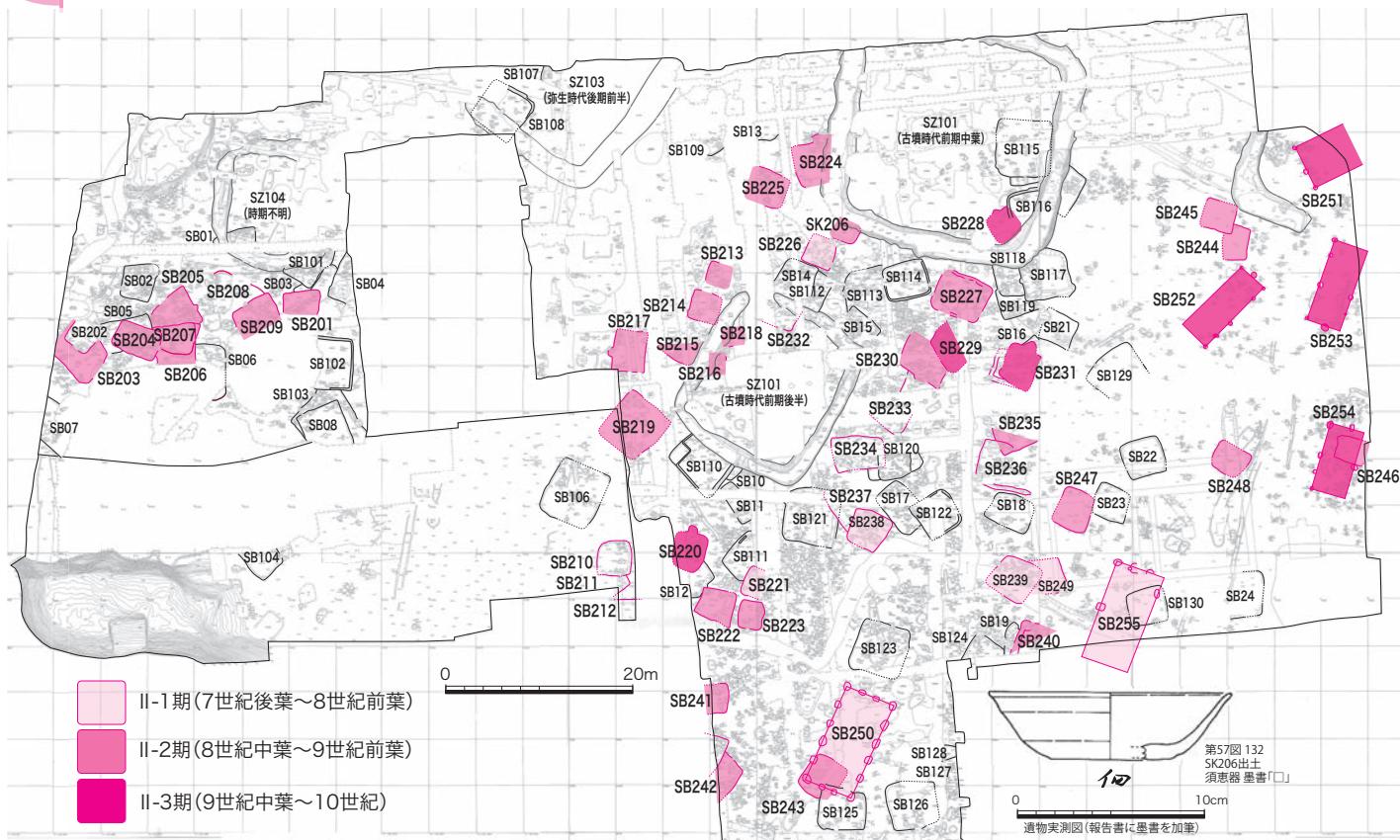


図5 名古屋城三の丸遺跡 愛知県図書館地点の古代の遺構分布図（愛知県埋蔵文化財センター所蔵平面図に加筆）

代の大規模造成によって遺構が滅失していることはいうまでもないが、古代の遺構がなくとも方形周溝墓や弥生・古墳時代の竪穴建物跡が存在していることから、図書館地点の調査区西部と中部にそれぞれ竪穴建物跡の集中を認めてよいだろう。西部の集中はその南側にある大規模な攪乱部分にまで広がっている可能性があるが、それは措くとして建物跡の重複が中部それに比べて著しい点は両者の性格の違いをあらわしているのではないだろうか。

最後のII-3期になると、調査区西部に建物跡はみられなくなり、中部から東端において掘立柱建物跡を主体としながらやや広範かつ散漫に分布する。興味深い点としては中部に竪穴建物跡、東端に平行の極端に長い掘立柱建物跡が分かれている点である。II-1・2期と同じ見方をすれば、これも階層差を示しそれが著しくなつ

た状態を想定することになる。しかしながら東端の掘立柱建物跡は平面規模や方位にばらつきがあり、この中に中心になりそうなものがないという点も不審である。また掘立柱建物跡4基に対し竪穴建物跡4基という同数の関係も気にかかる。それぞれが居住用と作業用のように目的ごとに分かれていた可能性もある。確かに当該期の遺物としては、調査区東部のグリッド(包含層)を中心に陰刻花文のある皿など綠釉陶器が約70点出土し、綠釉素地にも四耳壺のような特殊器形が認められる(城ヶ谷1990)。ただし綠釉陶器の大半は10g以下の小片である。これらの状況は、集落の中心がさらに東方の高所に移動している可能性を示唆している。

4. 8世紀創建の古代寺院

以上のように図書館地点II期の集落展開は調査区東半部に階層的上位の存在がうかがえる。このことと関わるのが東北東へ200~250mに位置する家庭・簡易裁判所地点の北部における発掘調査(愛知県埋蔵文化財センター1992)である。当該調査区での古代の遺構は約20m四方に限定されるが、掘立柱建物跡SB501の存在が際立っている(図7)。当該遺構は東西7間(12.5m)以上×南北1間(3.15m)という東西に細長いうえにさらに続くとみられる。また柱掘方は長径0.6~0.7mの方形を呈しており官衙的様相がある。報告書によると回廊状建物が想定されている。出土遺物は柱掘方P01から須恵器蓋小片(E-1)とP08から古代の有段式(玉縁あり)丸瓦(E-5)が1点ずつであり、前者は端部の折り曲げが小さいが山形の形状によりNN-32号窯式期に比定され、8世紀中葉と考えられる。さらに建物跡周辺からは軒平瓦2点と平瓦2点が出

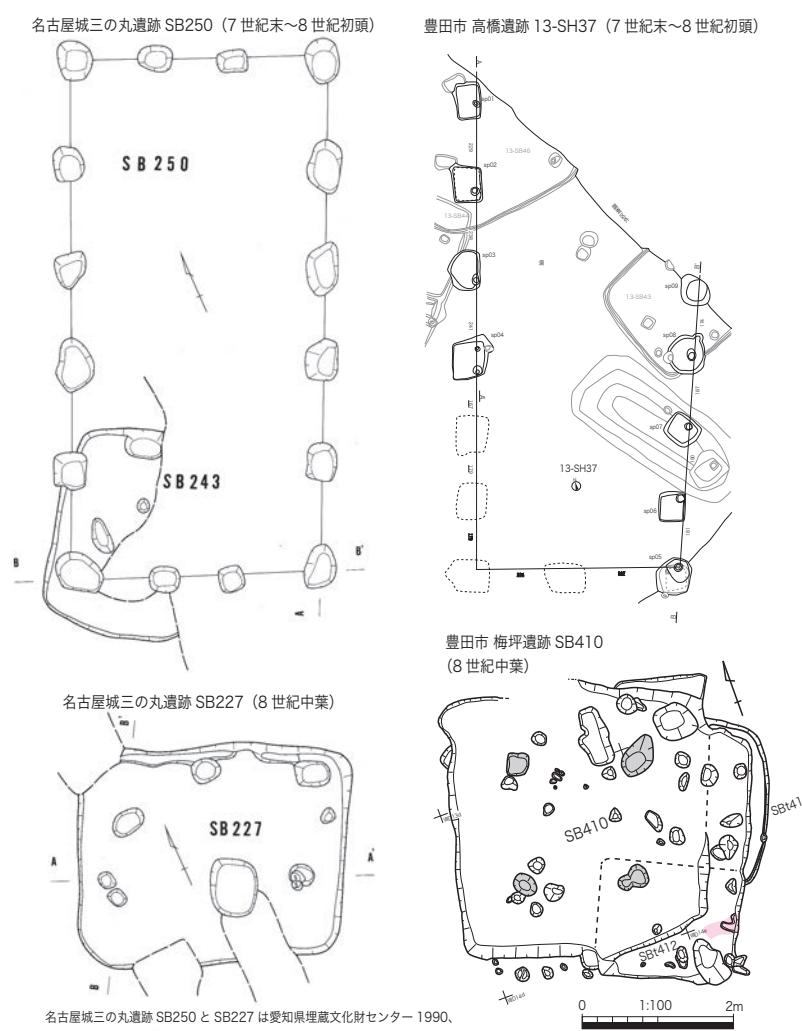
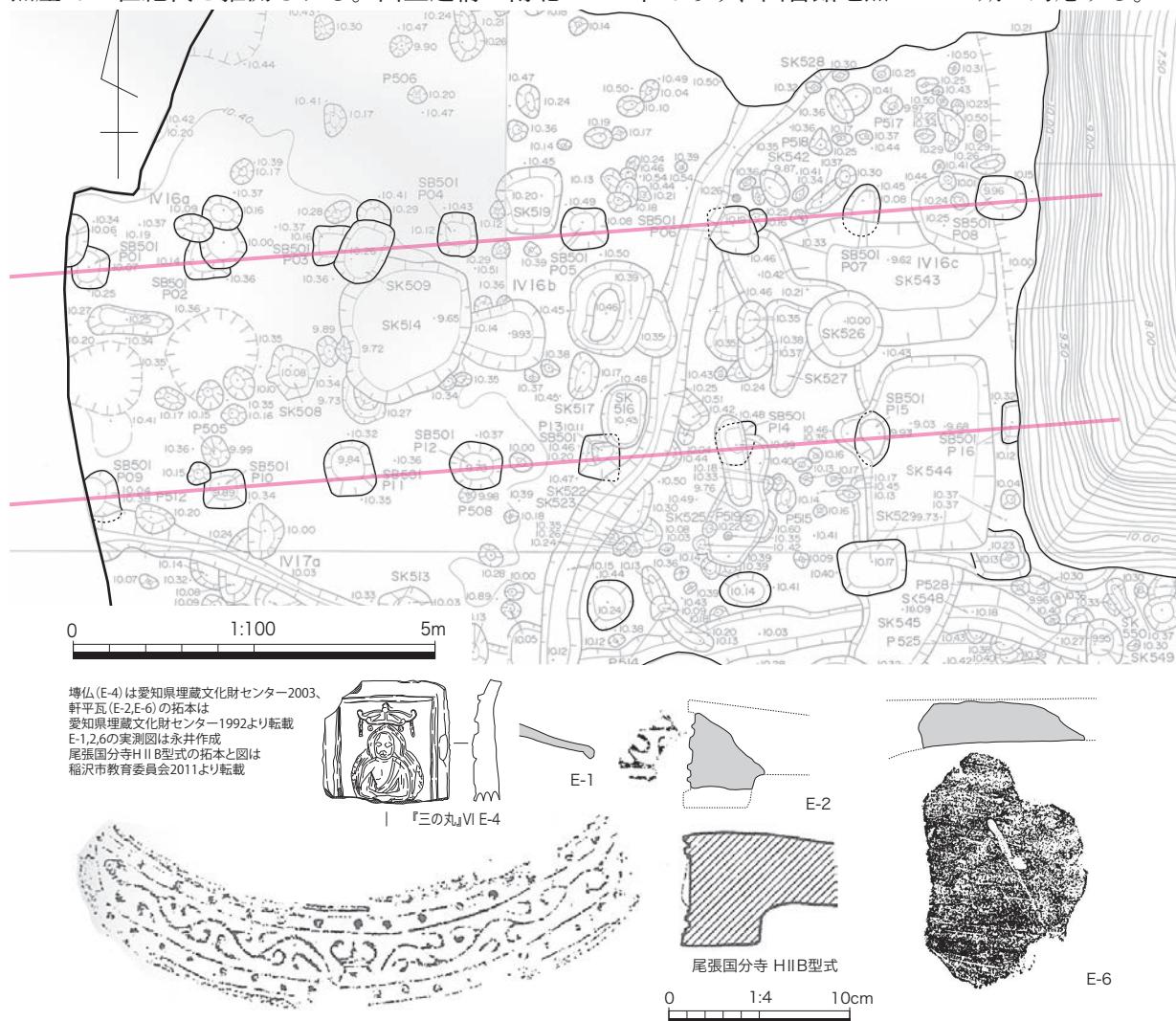


図6 7世紀末~8世紀中葉の大型建物の比較

土している。軒平瓦の瓦当 (E-2) は小片であるが、尾張国分寺 H II B 型式と同文と考えられる。当該資料は段顎であるが、もう 1 点 (E-6、報告書では平瓦) は曲線顎で、瓦当が滅失しているため型式不明である。前者は平城宮 6712C 型式の系譜にある愛智郡の郡系瓦に位置付けられるもので (梶原 2003)、これと組み合う軒丸瓦の瓦当文様は名古屋市昭和区若宮瓦窯 (H-79 号窯) やその南にある古觀音廃寺さらに尾張元興寺跡 (願興寺跡) でみられ、尾張国分寺 M V 型式に相当する。このことから家庭・簡易裁判所地点の SB501 に葺かれた瓦はこれらに連なる愛智郡系瓦であったと評価できる。

そして、瓦葺き建物に関して家庭・簡易裁判所地点の中部では須恵質の博仏 1 点も注目される (愛知県埋蔵文化財センター 2003)。猿投窯産で 8 世紀代と推測される。出土遺構は南北

溝 SD501 で、15 世紀中頃までの遺物が含まれておりその西側で並行する SD509 とともに幅約 3.5m の南北道路側溝であったと考えられる。もちろん時期が中世以降に下るのであるが、古くからの地割を示している可能性がある。また図書館地点の包含層からも瓦が 3 点出土している。これらの遺物の状況から市澤泰峰氏は「寺院は、家庭・簡易裁判所、地方簡易裁判所庁舎地点付近を中心とした、台地の西寄りに所在」したと推測している (市澤 2013)。瓦の量が少ない点については、整地時に徹底的な瓦礫撤去がなされた可能性もあり一概に言えないが、SB501 堀方内からの出土も寡少であることから本格的な堂塔があったとは言い難い。筆者も SB501 が北面回廊になるような小規模寺院の存在を想定したい。いずれにせよ時期は 8 世紀後半であり、図書館地点の II -2 期に対応する。



西地区の最後に中央新幹線名城非常口地点の堅穴建物跡3基にもふれておく。検出された堅穴建物跡3基のうち丸みの強い隅丸長方形となるSB1000（東西5.22m×南北3.68m）とSB1001（東西3.41m以上×南北3.38m）が確実視でき、調査区南東隅のSB1273はやや不整形ながら須恵器瓶類が出土している。SB1000出土須恵器蓋はI-25号窯式期で8世紀前葉の年代となろう。これらの遺構検出面の標高は11.5m前後で、図書館地点が11.1m以下、簡易裁判所地点北部で10.4mに比べると際立って高いことがわかる。これは先述したように天守から南東へ伸びる尾根筋に位置するからである。この地点から掘立柱建物跡SB501の地点までは南西へ400m離れており、その間に県警本部地点と名城病院地点（名古屋市教育委員会1997）があるがいずれも古代の遺構・遺物がなく、両者が一連の集落に属していたとは考えにくい。後述するように三の丸北地区の集落に関連しているものと思われる。これに加えて特別史跡名古屋城跡の範囲に含まれる本丸御殿跡の発掘調査（名古屋市2012）で検出された遺構に、堅穴建物跡の壁溝の可能性が指摘されているSD08とSD09がある。SD08から土師器小片が出土しているのみで時期が特定しにくく、遺構の性格を特定するに至らない。

次に名古屋城三の丸遺跡の北地区の古代集落について確認する。北地区で一定以上の面積で発掘調査を行ったのは名古屋病院地点（愛知県埋蔵文化財センター2005）と同医療センター地点（独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター2011）である。名古屋病院地点では5～6世紀の円筒埴輪を含む須恵器があり、その後H-44号窯式期（6世紀末～7世紀前葉）に堅穴建物3棟と掘立柱建物2棟で構成される集落が開始される。その後はI-17号窯式期～C-2号窯式期（7世紀後葉～8世紀初頭）に1～2棟、O-10号窯式期（8世紀後葉）に1棟、K-90号窯式期（9世紀中葉～後葉）に1～2棟と若干数で推移する。所々で遺物のない時期もあることから、断続的な集落だったと推測される。内容的にみて上位階層の有力者がいたとは考えにくい。興味深い点として7世紀後葉～8世紀前半を中心とする三河型（系）土師器長胴甕（E-

174・192・193・195）のあることで、当該遺跡から東に位置する長久寺遺跡でも典型的な三河型土師器甕（遺物番号72）が出土しており（学校法人金城学院・株式会社二友組2017）、8世紀代に三河地域との物資のやりとりがあったことをうかがわせる。

一方医療センター地点では、5世紀後半を中心とする堅穴建物跡7基、7世紀代は希薄となるものの8世紀代に機能していたと考えられる掘立柱建物跡2基（SB1・SB2）が検出されている。いずれも東西棟でSB1は桁行3間、SB2は同4間でいずれも柱掘方が方形となっている。建物方位はグリッド北からやや西に振れて

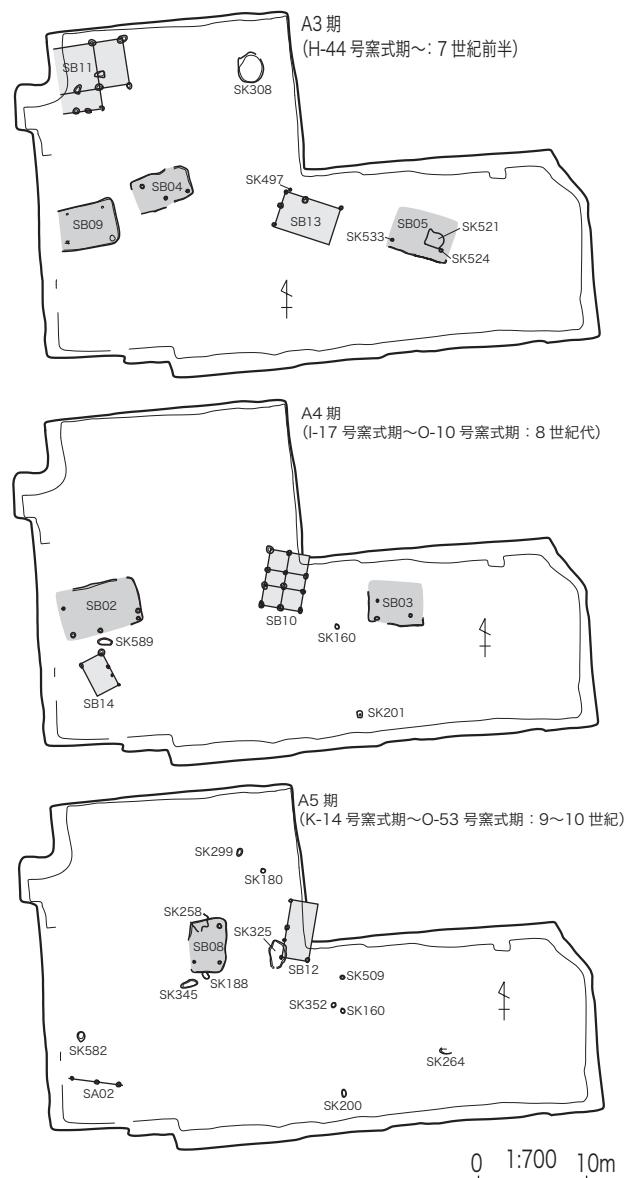


図8 名古屋病院地点における古代集落の変遷
(愛知県埋蔵文化財センター2005を改変)

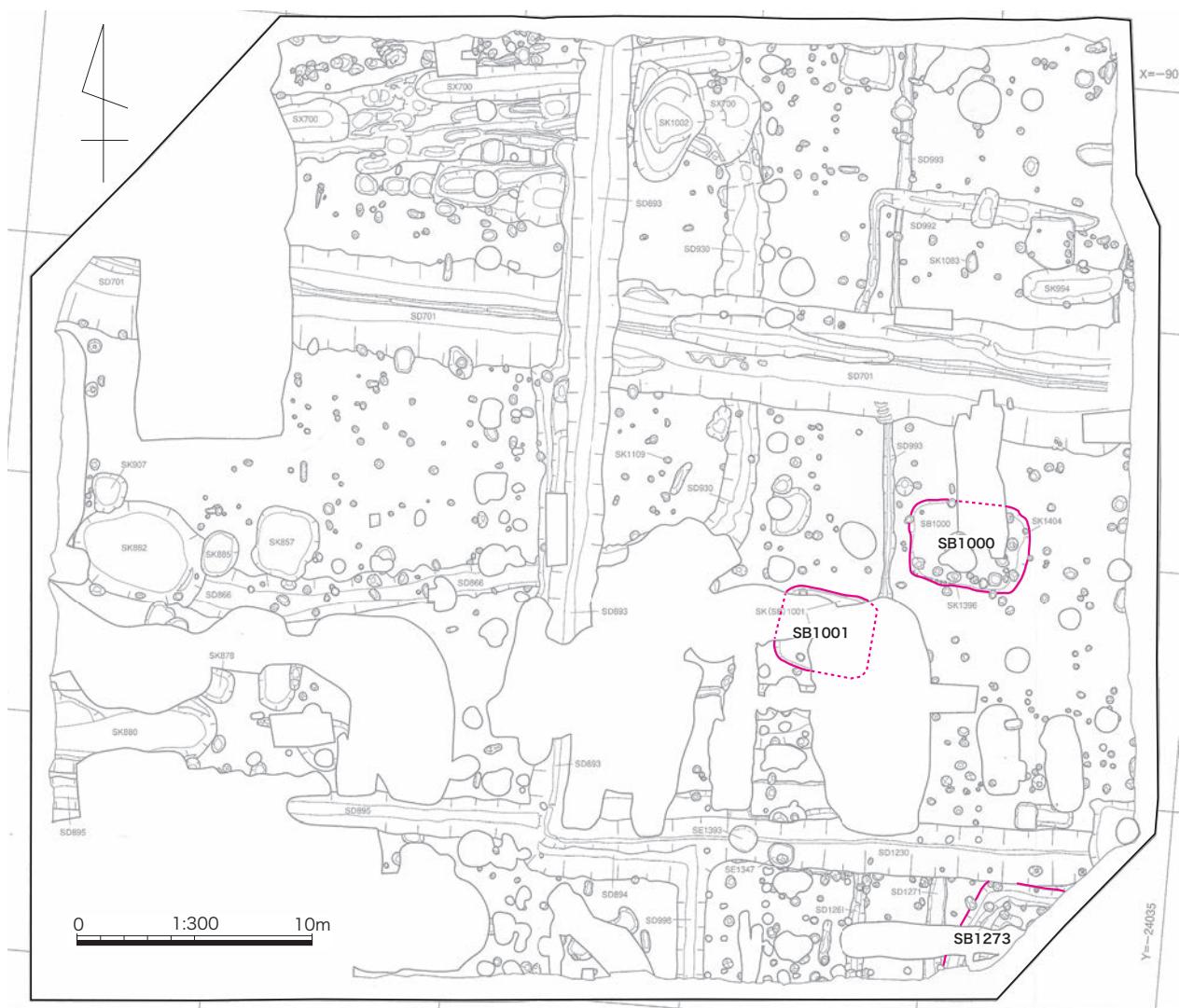


図9 名古屋城三の丸遺跡 中央新幹線名城非常口地点の古代の遺構分布図（名古屋市教育委員会 2017に加筆）

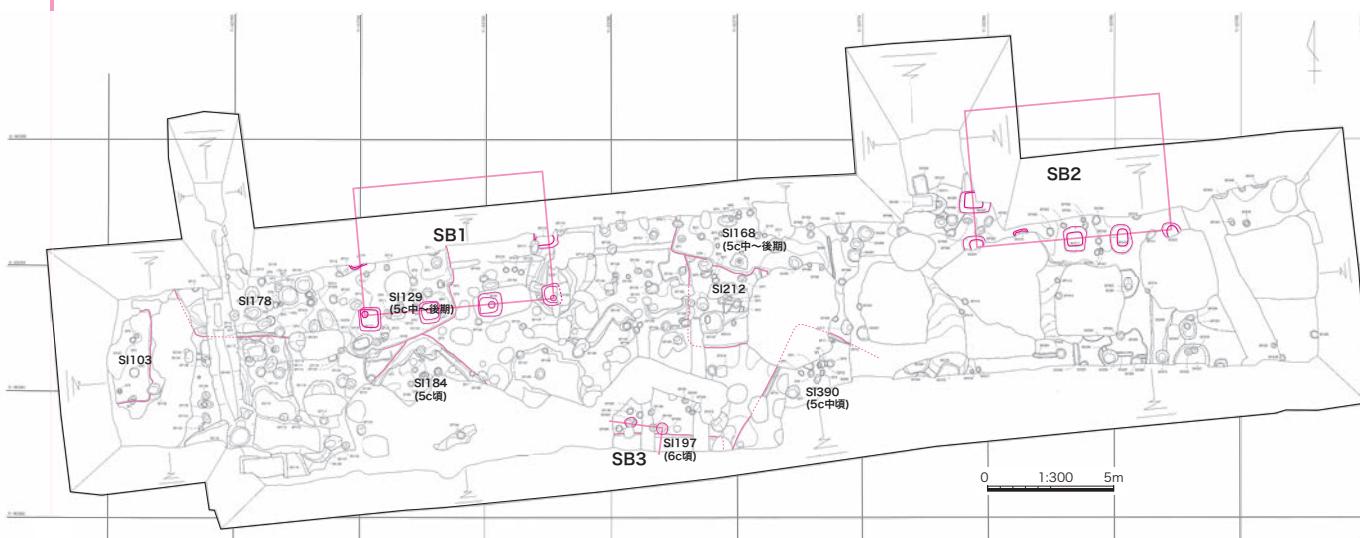


図10 名古屋城三の丸遺跡 名古屋医療センター地点の古代の遺構分布図
(独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター 2011に加筆)

いるが、両者間は東西に並列関係にある。出土須恵器は8世紀中葉～後葉が主体で灰釉陶器以降は激減する。

5. まとめにかえて

以上、名古屋城三の丸遺跡の西地区と北地区における古代集落の状況を確認した。いずれも古墳時代中期（5世紀）には古墳群が形成され、特に北地区では5世紀後半に台地北縁近くで堅穴建物主体の集落があり、6世紀末にかけて拡大もしくは移動を伴っているのかやや台地の奥まったところでの集落継続がみられる。これは西地区にはない現象であり注意しておきたい。その後7世紀半ばで一旦希薄になるが、同後葉には西・北地区ともに集落が開始される。この段階は西地区で大型掘立柱建物に有力者の存在が認められる。一方、北地区は隅丸長方形の堅穴建物1～2棟で構成される規模の小さな集落で、上位の階層については不明である。そして8世紀前葉にかけて旧地形の尾根筋近くまでこれと似たような集落が展開している。しかしこれを最後に西・北地区ともに一旦集落が縮小したようである。

その後8世紀中葉になると、西地区でやや大型の堅穴建物SB227などを核に2つ以上の建物グループからなる集落が再興され、同時にやや奥まった地点で小規模寺院の造営がなされる。この寺院は7世紀後半の「白鳳寺院」の造営ラッシュのものとは一線を画しており、愛智「郡系瓦」が示すように尾張国分寺や愛智郡家との関わりによって完遂されたものである。このことから当該期の集落の有力者が愛智郡内で一定の地位があったと推測でき、さらに当該地点が愛智郡域にあることが想定されよう。これに対して北地区は、名古屋病院地点の堅穴建物SB02ぐらいしかなく、きわめて対称的な状況となっている。このことは、当該時期の北地区が西地区の集落とは別の存在だったことを示唆している。しかもこの状況は、縁釉陶器の出土状況をみると9世紀代まで継続しており、この間に、郡を単位とする地域運営の違いがより定着していったものと考えられる。

（謝辞）名古屋城三の丸遺跡SB501出土須恵器については城ヶ谷和広氏よりご教示を受けた。記して感謝申し上げます。

文献一覧

- 愛知県史編さん委員会 2016『愛知県史 通史編Ⅰ 原始・古代』愛知県
愛知県埋蔵文化財センター 1990『名古屋城三の丸遺跡（Ⅰ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第15集
愛知県埋蔵文化財センター 1992『名古屋城三の丸遺跡（Ⅲ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第37集
愛知県埋蔵文化財センター 1992『名古屋城三の丸遺跡（Ⅴ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第60集
愛知県埋蔵文化財センター 2003『名古屋城三の丸遺跡（Ⅵ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第115集
愛知県埋蔵文化財センター 2005『名古屋城三の丸遺跡（Ⅶ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第127集
愛知県埋蔵文化財センター 2008『名古屋城三の丸遺跡（Ⅷ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第161集
市澤泰峰 2013『名古屋城三の丸遺跡』『新修名古屋市史 資料編 考古2』名古屋市
稻沢市教育委員会 2011『尾張国分寺跡発掘調査総括報告書（Ⅰ）-第1次～第13次調査総括・第14次調査-』
岡安雅彦 1996「西三河における堅穴住居形態の変遷 -竈導入以降の堅穴住居を中心に-」『安城市歴史博物館研究紀要』No.3
梶原義実 2003「造瓦組織の復原と瓦塔文 -東海地方の国分寺から-」『史林』86-3
学校法人金城学院・株式会社二友組 2017『長久寺遺跡発掘調査報告書 -金城学院中学校建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査-』
城ヶ谷和広 1990「IV考察 4.三の丸遺跡出土の縁釉陶器素地について」『名古屋城三の丸遺跡（Ⅰ）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第15集
新修豊田市史編さん委員会 2017『新修豊田市史 20 資料編 考古III 古代～近世』愛知県豊田市
独立行政法人国立病院機構 名古屋医療センター 2011『名古屋城三の丸遺跡 -職員宿舎建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書-』
永井邦仁 2017「古代ナゴヤの寺院と集落」『平成29年度考古学セミナー あいちの考古学2017』愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2018「豊田市における奈良・平安時代の堅穴建物跡について」『豊田市史研究』第9号 豊田市
名古屋市 2012『特別史跡 名古屋城跡 本丸御殿跡発掘調査報告書 -第5・6・7・8次調査-』
名古屋市教育委員会 1994『名古屋城三の丸遺跡 第4・5次発掘調査 -遺構編-』
名古屋市教育委員会 1994『名古屋城三の丸遺跡 第4・5次発掘調査 -遺物編-』
名古屋市教育委員会 1995『名古屋城三の丸遺跡 第6・7次発掘調査報告書』
名古屋市教育委員会 2017『名古屋城三の丸遺跡 第12次発掘調査報告書（中央新幹線「名城非常口」地点）』
名古屋市上下水道局水道本部 2004『名古屋城跡巾下門跡発掘調査報告書 -西区樋ノ口町地内 400 粕配水管工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書-』

表1 名古屋城三の丸遺跡の古代集落の建物一覧

地区	調査年次	種別	遺構名	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	方位	柱穴	カマド	壁溝	周溝状掘方	時期 (遺物)	曆年代	備考1(→は先後関係)
西地区	図書館地点 1988年	竪穴建物	SB201	3.8	3.8	0.1~0.15	N-87°-E	2	不明	?	なし	須恵器碗(O-10),土師器甕	8世紀後葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB202	3.1	3	0.1	N-39°-E	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器甕(C-2)	8世紀後葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB203	-	4.5	0.6	N-37°-E	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器甕,長頸瓶(O-10?)	8世紀後葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB204	4.9	3.1	0.3	N-72°-W	4~6	なし	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB205	-	4.3	0.1	N-65°-E	特定しにくい	なし	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB206	4.6	4.6	0.2	N-83°-E	4?	なし	不明瞭	貼床?硬面	須恵器蓋,双耳瓶(O-10)	8世紀後葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB207	3.7	3.4	-	N-20°-E	特定しにくい	なし	南辺にあり?	なし	須恵器蓋,扁壺,長頸瓶(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB208	-	-	-	-	特定しにくい	不明	不明	なし	須恵器蓋,双耳瓶(O-10)	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB209	4.7	-	0.2	N-58°-E	特定しにくい	不明	不明	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB210	3.8	3.6	0.3	N-0°	特定しにくい	不明	不明	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB211	-	-	0.4	N-26°-W	特定しにくい	不明	不明	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB212	-	3	0.3	N-0°	特定しにくい	不明	不明	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB213	-	3	0.2	N-17°-E	特定しにくい	不明	不明	なし	須恵器蓋,長頸瓶(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB214	3.2	-	0.1	N-19°-E	特定しにくい	不明	不明	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB215	-	-	0.1	-	特定しにくい	不明	不明	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB216	-	-	0.1	-	特定しにくい	不明	不明	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB217	4.1	3.4	0.1	N-6°-E	特定しにくい	西辺中央?	南辺にあり?	なし	土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB218	-	-	0.1	-	特定しにくい	なし	なし	なし	土師器甕	8世紀後葉?	報告書II-2期
		竪穴建物	SB219	-	-	0.1	-	特定しにくい	なし	なし	なし	須恵器蓋(NN-32?)	8世紀中葉?	報告書II-2期
		竪穴建物	SB220	4	-	0.2	N-9°-E	2	北辺,支脚石	なし	なし	土師器蓋,須恵器蓋,灰釉陶器(K-90)北東隅に土坑2	9世紀中葉~後葉	報告書II-3期
		竪穴建物	SB221	4.6	3.2	0.2	N-72°-E	3	不明	なし	なし	須恵器蓋(I-17)	7世紀後葉	報告書II-1期,四隅柱穴
		竪穴建物	SB222	東西3.8	南北3.4	0.1	N-80°-W	4	なし	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀中葉~9世紀前葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB223	4.2	3.4	0.1	N-5°-E	2?	西辺中央	南辺にあり	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀後葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB224	-	-	0.1	-	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀後葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB225	-	3.5	0.2	N-75°-W	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	8世紀後葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB226	-	3.2	0.1	N-19°-W	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	7世紀後葉	報告書II-1期
		竪穴建物	SB227	5.8	4.6	0.2	N-70°-W	3~4	不明	一部あり	南西部あり?	須恵器蓋,碗,杯(O-10)	8世紀中葉~9世紀前葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB228	-	-	0.2	-	特定しにくい	不明	なし	なし	灰釉陶器蓋,鉄製品刃部	9世紀中葉~10世紀	報告書II-3期
		竪穴建物	SB229	5	-	-	N-30°-W	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	報告書II-3期	報告書II-3期
		竪穴建物	SB230	5.2	-	0.1	N-57°-W	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	報告書II-3期	報告書II-3期
		竪穴建物	SB231	4	3.5	0.1	N-21°-E	特定しにくい	不明	なし	なし	灰釉陶器蓋,碗(K-90)	9世紀中葉~後葉	報告書II-3期
		竪穴建物	SB232	-	-	0.1	-	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋,碗,杯(O-10)	9世紀中葉~後葉	報告書II-3期
		竪穴建物	SB233	-	-	0.1	-	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	9世紀中葉~後葉	報告書II-3期
		竪穴建物	SB234	5.5	3.6	0.1	N-90°	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	9世紀中葉~後葉	報告書II-3期
		竪穴建物	SB235	4.2	3.8	0.1	N-18°-W	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	9世紀中葉~後葉	報告書II-3期
		竪穴建物	SB236	-	5.2	0.2	N-78°-W	特定しにくい	不明	南辺にあり	なし	須恵器蓋,碗,杯(O-10)	9世紀中葉~後葉	報告書II-3期
		竪穴建物	SB237	-	-	0.1	-	特定しにくい	不明	なし	あり?	須恵器蓋,碗,杯(O-10)	9世紀中葉~後葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB238	4.2	3.7	0.1	N-60°-W	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(I-41)	7世紀末	報告書II-1期
		竪穴建物	SB239	4.5	4.3	-	N-52°-W	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(NN-32),土師器甕	7世紀後葉	報告書II-1期
		竪穴建物	SB240	-	-	0.2	-	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋,碗,杯(O-10)	7世紀後葉	報告書II-1期
		竪穴建物	SB241	-	2.7	0.2	N-0°	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋,土師器甕,灰釉陶器皿(K-14)	8世紀後葉~9世紀前葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB242	-	-	-	-	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋,土師器甕,灰釉陶器皿(K-14)	8世紀後葉~9世紀前葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB243	4.5	-	0.1	N-53°-E	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋,壺(NN-32~O-10)	8世紀中葉~後葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB244	3.8	2.4	0.1	N-4°-E	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋,壺(NN-32),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB245	3.6	3	-	N-9°-E	特定しにくい	不明	なし	なし	土師器甕(K-90)	8世紀中葉?	報告書II-2期
		竪穴建物	SB246	3.4	2.8	0.2	N-77°-W	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋,壺,平底瓶(O-10~K-14)	8世紀後葉~9世紀前葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB247	4.4	3.8	0.1	N-15°-E	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(O-10),土師器甕	8世紀後葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB248	4	2.9	0.2	N-61°-W	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器蓋(NN-32?),土師器甕	8世紀中葉	報告書II-2期
		竪穴建物	SB249	3.8	-	0.2	N-7°-W	特定しにくい	不明	なし	なし	須恵器フ拉斯コ瓶	7世紀後葉	報告書II-1期
		掘立柱建物	SB250	10.8	5.3	-	N-24°-E	-	5間×3間南北槻	-	-	-	7世紀後葉~8世紀初頭	報告書II-1期
		掘立柱建物	SB251	-	0.7~0.8	N-52°-E	長方形0.6~0.8	2間×1間以上	-	灰釉陶器	-	-	9世紀	報告書II-3期
		掘立柱建物	SB252	8.8	3.6	-	N-44°-E	-	4~5間×2間	灰釉陶器	-	-	9世紀	報告書II-3期
		掘立柱建物	SB253	9	4.4	-	N-20°-E	-	3~4間×2間	灰釉陶器	-	-	9世紀	報告書II-3期
		掘立柱建物	SB254	7.1	3	-	N-16°-E	-	3~4間×2間	灰釉陶器	-	-	9世紀	報告書II-3期
		掘立柱建物	SB255	-	5.2	-	N-24°-E	-	4~5間以上×3間	-	-	-	7世紀後葉~8世紀初頭	報告書II-1期
		掘立柱建物	SB501	12.5以上	3.15	-	西へ振れる	方形0.6~0.7	7間以上×1間	須恵器蓋,有段式丸瓦	-	-	8世紀中葉~後葉	回廊状建物と推定
北地区	名古屋病院 2002年	竪穴建物	SB02	5.42	4.46	0.12	西へ振れる	特定しにくい	なし	-	-	須恵器長頸瓶(O-10)	8世紀後葉	報告書A4期,SB04-07.09~SB02
		竪穴建物	SB03	5.12	2.36	0.23	ほぼ南北	特定しにくい	なし	-	-	須恵器蓋(C-2)	8世紀前葉	報告書A4期,SB05~SB03
		竪穴建物	SB04	5.48	3.44	0.26	西へ振れる	特定しにくい	なし	-	-	須恵器(H-44)	7世紀前半	報告書A3期,SB08~SB04~SB02
		竪穴建物	SB05	5.52	1.8	0.21	東へ振れる	特定しにくい	なし	-	-	須恵器(H-44)	7世紀前半	報告書A3期,SB08~SB02
		竪穴建物	SB07	5.08	3.8	0.25	西へ振れる	特定しにくい	なし	-	-	須恵器蓋,杯(C-2)	8世紀前葉	報告書A4期,SB09~SB07~SB02
		竪穴建物	SB08	4.94	3.56	0.2	ほぼ南北	特定しにくい	なし	-	-	灰釉陶器(K-90),土師器三河型甕	9世紀	報告書A5期,SB08~SB04
		竪穴建物	SB09	5.38	4.06	0.14	西へ振れる	特定しにくい	なし	-	-	-	-	報告書A3期,SB09~SB02,07
		掘立柱建物	SB10	5.2	3.7	-	東へ振れる	円形	3間×2間総柱	-	-	-	-	報告書A4期
		掘立柱建物	SB11	6.8以上	6.2	-	西へ振れる	円形	2間以上×2間,三面庇?	-	-	-	-	報告書A5期
		掘立柱建物	SB12	5.3	2.5	-	東へ振れる	円形	2間×1間	-	-	-	-	報告書A5期
名古屋病院 センター 2009年		掘立柱建物	SB13	5.3	3.3	-	西へ振れる	円形	2間×2間	-	-	-	-	報告書A3期
		掘立柱建物	SB14	3.3	2.1	-	西へ振れる	円形	3間×1間	-	-	-	-	報告書A4期
		掘立柱建物	SA01	4.6	-	-	東西方向	円形	2間	-	-	-	-	報告書A3期
		掘立柱建物	SA02	4.4以上	-	-	東西方向	円形	2間以上	-	-	-	-	報告書A5期
尾根	中央新幹線 非常口 2015年	掘立柱建物	SB1	7.5	2.2以上	-	N-4°-W	方形0.8	3間×1間以上,東西棟	須恵器蓋	-	-	8世紀	SB2と並列
		掘立柱建物	SB2	7.7	1.9以上	-	N-5°-W	方形0.84~0.96	4間×1間以上,東西棟	須恵器広口壺(I-41)	-	-	8世紀初頭	SB1と並列
		掘立柱建物	SB3	1.3以上	?	-	N-11°-E	円形	2間以上柱列のみ	土師器小片	-	-	?	柱列の可能性